經濟哲學の問題

左右田喜一郎

カントの包括的且つ自然科學的なる自然概念（Naturbegriff）(1)の構成を傳統的に繼承して、リールが科學的方法の統一を主張するに對し、(2)飽くまでリッケルトがウキンデルバンドの小論文(3)より發足して、科學の方法論を決定し、之を二元主義に導きたるは、今や學界に周知の事實である。(4)而して此の二の異なる論議の認識論上の深き根基を、リッケルトは因果律（Kausalität）と自然法則（Naturgesetz）とに峻別して、前者は認識全般の一構成的範疇（Konstitutive Kategorie）たるが故に、所與（das Gegebene）に『客觀的現實態』（objektive Wirklichkeit）なる一の特定なる概念の形式を與へ、此くして之を構成し、之を可能ならしむるものであるけれども、後者は單純に方法論的形式（methodologische Form）に過ぎざるが故に、客觀的現實態其自身の構成に與らずして、唯だ其の見方、考へ方（Auffassung）を定むるものであるとするに反して、(5)リール等の主張は論理上此の兩者を區別せずして、共に認識の構成的範疇なりとすること、カントが其の當

時の學術の狀態より見て科學卽自然科學なりとして、リッケルトが自然科學のみの前提なりとする自然法則を以て直に客觀的現實態の範疇としたるに(6)傚へるものゝ如くである。余は大體に於てリッケルトの結論に贊同の意を表するものであるが、併し之を立證する爲めに論ぜられたる上述の認識論上の根基及び其の之より生ずる當然の歸結に對しては考ふべき點少からずと思ふ。

(1) Kant: Prolegomena. 1. A. 1783. S. 71

(2) Die Kultur der Gegenwart (herausgegeben von P. Hinneberg) Bd. I. Abt. VI. S. 86.

(3) Windelband: Geschichte und Naturwissenschaft. 1894.

(4) Rickert: Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung. 3. A. 1913.

Rickert: Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft 2. A. 1910.

邦文にては例へば西田博士著思索と體驗百二十一頁以下

(5) Rickert: Der Gegenstand der Erkenntnis. 2. A. 1904. S. 212 ff.

(6) Kant: Kritik der reinen Vernunft. 1781, 1787.

因果律と自然法則とを認識の成立上に於て峻別する所ある爲めに、リッケルトは前者に對しては認識主體として「判斷意識一般」das urteilende Bewusstsein überhaupt を立し不許不Sollen の形式としての構成的規範 die konstitutiven Normen に對應せしめたるに

反して、後者(自然法則)は單純に經驗的認識主體 das empirische erkennende Subjekt の認識又は見方の形式 Erkenntnisform oder Auffassungsform と見るに至つたのである。其の結果史學は自然科學と幷行の立脚地に立つて、科學としての位置を與へらるゝを得るに至つたのは、誠に巧妙の論議と云ふべきである。併し方法論上科學の二元主義を主張し得る根據は或は余が從來二三の機會に於て述べた樣に(7)認識對象其自身に於て合理的なるものと、不合理的なるものとが終極に於て分離せらるべからずと云ふ吾等が認識機關の約束に依るものに非るなきか。カントも「純粹理性批判」(1. A. S. 734) にも「プロレゴメナ」(1. A. S. 72) にも述べた樣に、吾等の認識に於て二の相互に歸一することを得ざるものゝ存在するを認めざるべからざる點より逆行して、科學的知識に二元主義の成立するを見るは、吾等の認識にとりて避くべからざる論理的構造には非ざるなきかを疑ふのである。

(7) 拙著 Die logische Natur der Wirtschaftsgesetze 1911. S. 23 ff.
拙稿經濟學認識論の若干問題(經濟論叢第一卷第三號及第四號所載)

此の點は暫く措いて茲處には論ぜずとするも、カントは das Gegebene より直に Naturbegriff に移りたるに反して、リッケルトは其の中間に於て一の概念を挿入して、自

然科學及歴史の二元的方法論上の認識形式に攝取せらるゝ前段に於て、諸種の構成的範疇によつて形成せらるゝ『客觀的現實體』(objektive Wirklichkeit) を見なければならぬと論じ、各々の科學上の知識は其の認識素材たる客觀的現實體を科學的に修整(bearbeiten)することによつて成立すると云ふ。此の論によつて physisch und psychisch の對立も亦構成的範疇の成果には非ずして、概念構成の成果なりと見なければならぬ。此の如くして方法論は、其自身に他のものと交渉なく成立せる客觀的現實體を、概念構成の材料として取扱ふ所の極めて經驗的實在論的根據の上に立つものとなつて來る。勿論リッケルトは此の場合に於ても、彼の主張する超越的觀念論の立場より諸科學的知識の客觀性を立證し得べき根據を論ずることを忘れはしない。從つて科學的概念構成の形式は超越的規範を識認(anerkennen)するによつて確立せらるとし、且此の如き概念構成の規範其自身は凡ゆる人間的、凡ゆる經驗的又は有限的の認識主體に對して超越的に妥當なりと主張するが故に、此の意味に於て方法學は亦規範學若しくは價値學と呼ばるべきものとなる。

乍併茲處に吾等が考へざるべからざることは、科學的認識の成立に關して Dinglaftigkeit, kausalprinzip の如き構成的範疇と、Gesetzmässigkeit, historischer kulturwert の如き方

法論的形式とを分ち、後者を第二次的となし、之を以て假令心理的經驗論に於て云ふ如き認識主體に對せしめざるも、尙判斷意識一般に對峙せしめざる爲め、自然科學的概念としての自然もカントの考へたるよりは一層經驗的主觀の要素を含有するに至つたことである。卽ち方法論的形式は他の論者の場合よりも一層經驗的なる認識主體の考へ方又は概念形式 Auffassungs- oder Begriffsform なりとしたる點に在る。從つてリッケルトの說にして眞なりとし、其の二元的規範たる自然法則性と歷史的文化價値とに係はりて各其の概念を得、之に依りて各學は學として其の獨立の存在を得べしとするも、氏の說によりては各學の成立は二元的方法論的形式の孰れにか又は其の學の各部に於て双方に與ることを得ば異れりと論ぜらるべきであつて、之に反して各學は必ず唯其の一にのみ與からざるべからずと云ふ結論は之を導くことを得ない。換言すれば各科學が科學的知識の體系たるが爲めには其の何れかの認識目的に必ず係はらしめざるべからざるも、而かも其の認識目的の一を有するも可、又二を併せ有するも可なりと云ふ結論に達するのであつて、各科學は其の認識目的として必ず其の一のみを有せざるべからずと云ふ議論は出て來ない。是方法論的形式を以て認識の構成的範疇なりとせずして、之に第二次的の地位を與へたるより

來る當然の歸結である。實際に於てリッケルトは力學、物理學に對峙せしめて、歴史を擧げて其の異なる認識目的を有する學問として、其の兩極端に於て相互の獨立を主張するの他面に於ては、此の兩學の過渡的の中間範圍 Mittelgebiet (8) として生物學、經濟學等を擧げて居る。卽ち前者の對峙に於て、各認識目的の一が方法論的規範として認識主體の識認を要求し、之によりて各自より分つ獨立の學的知識が形成せらるゝものであるが、後者の中間範圍に屬するものにあつては、其の各部の知識は必ず其の認識目的の何れにか與る所あつて形成せられたりとするも、其の此の如く異なりたる認識目的を有する知識の雜然たる集團を稱して、或は生物學或は經濟學と云ふのであると主張する。恰も數種の異なりたる酒を一瓶中に混成して、其の外部に「コックテール」と云ふ「Etikett」を貼付するに等しいものと見て居る、余は此の點に對して疑なきを得ない。

(8) Rickert: Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft. 2. A. 1910. S. 106. ff.

凡そ一個の學問が學としての獨立の存在を保有し得るが爲めには、其の認識目的は吾等の認識成果を形成するに於て、飽くまで構成的範疇の形式を通じて表彰せられて來なければならない。勿論此の場合に於て方法論的形式の名を冠らしめんと

することは單純なる命名の問題であつて重要なることではない。乍併只此の名を冠らしむることに依つて、其の構成的範疇としての性質を否定せんとすることには、余は其の可なる所以を知らない。リッケルトの主張によりて見ても、例へば因果律の範疇のみによりて形成せられたる客觀的現實體は、實在するものには非ずして、只一個の抽象的思索の產物に過ぎないから、吾等の認識の成果としては更に此の上に方法論的形式の存在を要するとするのである。卽ち吾等の認識の成果には、氏の所謂構成的範疇と方法論的形式との併存を要すると見るのである。只構成的範疇によつて形成せられたる客觀的現實體を認識素材として、科學的知識を生成せしめん爲めには、方法論的形式の一に與からしむるを要し、其の認識主體は構成的範疇に對するものよりも更に經驗的なり得と云ふこと前に述べた通りである。余は之に對して認識成果成生の階段を二に分ち、其の前段に於て構成的範疇によつて客觀的現實體を得る認識主體は判斷意識一般にして、後段に於て方法論的形式によつて科學的知識を得るものは經驗的認識主體たり得とする理由を解するに苦しむのである。

此の場合にリッケルトは曰ふ、前者の判斷意識一般は客觀的現實體の形式に關してはIdeelであり、內容に關してはカントの意味に於けるIdeeである。其の實現の可

能に關しては、如何なる個々的認識主體にも之に近づくことすら不可能と云はねばならぬ、何となれば科學的知識は直觀 Anschauung に非ずして概念を作るに在るが故に、此の概念の內容は決して客觀的現實體の直觀的內容と一致するものに非ずして、此の內容は全體としてのみならず又其の各部分に於ても、如何なる概念にも、そが存在する如く凡てを攝取せしめざる特性を有するものなるによる。卽ち認識は常に概念によつて客觀的現實體の內容を改造 umformen するものである。此の如く科學的概念構成の場合に考へらるべき形式は、客觀的現實體の概念を抑も最も初めに可能ならしむることに與るものに非ざるが故に、經驗的實在論の立場より見て謂ふ所の認識材料の中にも包含せらるゝものではなく、唯客觀的現實體の見方考へ方を決定するものである。此の故に構成的範疇と同列に論ぜらるべきものでもなく、從つて判斷意識一般に關係せしめらるべきものでもないと。(9)

(9) Rickert: Der Gegenstand, S. 206-7.

併し此論に於て謂ふ所の客觀的現實體は論者の範疇一般就中 Kategorie der Gegebenheit, Dinghaftigkeit, Kausalität 等の構成的範疇を經て生じたるものとして見て、其の場合に尙且科學的認識の場合と異なる樣に取扱はるゝことは至當であるか。卽ち客

觀的現實體は諸種の範疇により確立せられても尙概念的とならずして、直觀的に止まり得とする如き論法は至當であるか。假りに此の點を許すとしても、此の客觀的現實體を科學的認識成果とならしむる爲めに、茲に拉し來つた方法論的形式の何れかに從はしむることが個々的經驗的認識主體の任なりと云ふとも、既に概念構成の規範夫自身は凡ゆる有限的認識主體に對して超越的妥當性を要求すべきものなりとすれば、此の場合の認識が其の性質上果して客觀的現實體の成立と如何程迄異ならざるべからざるか。從つて其の認識主體を更に一層經驗的なるものとすることが至當であるかと云ふことも問題となる。

凡て之等の主張をなすに至つた根本は、或は方法論的形式の二が互に相反撥して獨立せるによりて、若し之を構成的範疇として論ぜんとすれば、此の如く互に相排する二の範疇なるにも不拘共に同時に係はらしめざるべからざる如き構成的のものなりと認めざるを得ずとなしたるによるか、又は其の兩者が構成的範疇として併立したる場合には、認識成果が精確なる科學的認識(又は不精確なる科學前期認識)たり得る爲には、其の二範疇の何れか一を撰ぶことを要するに至るものであるが、其の撰擇の理由は何處にあるか、之は到底發見することを得ぬと見たるに非ざるなきかと

余は疑ふのである。乍併こは範疇論一般の問題に於て既に解決せられたる問題であつて、特に茲處に關說するものにのみ特有なるものではない。余はリッケルトが客觀的現實體は唯一のみなるが故に、之に對して構成的なるものは凡ての科學に妥當なるべくして數種の方法なるものあり得べからずと論ずるけれども、(Rickert: Der Gegenstand. S. 234) 同じく構成的範疇であつても相互に相反して獨立するものゝ存在し得ぬ理由はあり得ないこと、假令種々の點に於て幾多の異論はありとしても、カントの範疇論の辨證論的構造に於て其可能は明かであると思ふ。之と同時に唯其の一を撰擇して認識の成果を齎すべき窮極の原因は、前に述べた樣に余は吾等の認識其自身の論理的構造に求めざるを得ぬと思ふ。而して實に茲處に其の理由を求め得ることによつて、初めて科學的認識の二元主義は立せられ得べきものと信じて居る。卽ち如何なる點から見てもリッケルトが科學的認識の二元主義を立つる根據を、方法論的形式が單純なる經驗的認識主體の Auffassungsform なりとする點に求め、從つて此くして生じたる二元的認識成果の混成體を目して、尙ほ一獨立學なりとする意見には余は飽く迄贊同することを得ない。若し余が上來記述したる如く構成的範疇と方法論的形式との區別を度して共に之を構成的範疇なりと見るときは、假令

認識成果は二元的となるも、或る一學が他學と分離して獨立の存在を保つが爲めには、其の學の認識目的は必ず此の二範疇の一に與る所なからざるべからずと云ふ結論を生じて來るのである。既に其の一の認識目的に係はらしめて一學が獨立して存在し、其の學に特有なる認識對象を得たる場合には、其の認識論的表面に於ては異なる數種の Auffassugsformen を許すべし、而かも其の形式の素材としての其の學の認識對象は、必ず認識目的の二元的なるものゝ唯だ一にのみ係はる所あるを要すと云ふべきである。

以上は認識の生成と云ふ方面から觀察したる論であるけれども、認識成果と云ふ方面から見ても同樣に論じられる。卽ちリッケルトは或る一獨立學の概念が、相反する二個の認識目的に係はらしめて各自成立せしめられ、此の如くして成立したる、異なる認識目的を包括する諸概念的知識によりて成れる一學全體は、一個の混成體なり得と說くけれども、余の思ふ所によれば一獨立學が一の確定したる且つ獨立したる認識目的を有することなくして存在し得と論ずるのは論理の矛盾たるを免れない。認識目的其自身に一種の混成體を考ふることは、論理上全然不可能である。若し一學が論理上に獨立したるものとしてカントが自然科學に對して爲したる意

味に於て begründen せんとするならば、其の學に特有なる認識目的を立證しなければならぬ。然らずんば一の學問は獨立したる學として見られ得ぬと云はねばならぬ。即ち一學が獨立して存在し得る根據としての認識目的其自身には如何なる意味に於ても混成體を認むることが論理上矛盾なりとの方面から見ても、各學は一の獨立學としては唯一の認識目的を有すべしと云はねばならぬ。即ち余はリッケルトに反して若くは或る意味に於て之より進むで、各學は二元的認識規範の何れにか係はらしめられて初めて可能となるに止まらず、各學は論理上一個の獨立の學として存在を保つが爲めには、唯其の一にのみ係はらしめられざるべからずと主張したい。

此の如く各學は二元的認識目的の唯だ一にのみ係らしめて獨立を保有せしめらると云ふ時は、各學は自然科學及び歴史の二の何れかに屬せしめられざるべからざると同時に、或は結極此二認識目的を理想的に表現する只二個の學問とのみなつてしまうに至ると論ぜらるゝ恐があるかも知れない。併し余は此の二學の夫々の範圍内に於て種々の學問が成立するの事實を非認しないのみならず、又之を以て混成學と見做す如き論理の矛盾を許さずして、尚且此の數種の學問の成立し得べき論理上の根據があり得ると思ふ。夫は各學の全部を通じて究極の認識目的は二に歸收

せらるゝけれども、凡そ認識素材を何等かの意義に於ける概念に依つて改造せられたる知識の統一的體系が學問なりと云ふ其の學問本然の性質に顧みては、各特殊科學は一定の認識目的に對應したる其の學特有の對象を有すべきである。換言すれば各特殊科學はそが法則科學たると事實科學に屬するとを問はず、凡て其の範圍内に於て獨立の認識目的を有すとせらるゝ以上は、其の認識目的を異なる程度及び異なる性質に於て内容的に制約せらるゝことによりてのみ一途に、究極の二認識目的に歸納せらるゝことを避け得るものである。即ち究極に於て二に歸收せらるゝ認識目的は、各其の範圍内に於て特異の内容的制約を受けて、之によりて特異の認識目的が規範として認識主體に對するによりて各特殊的經驗科學が可能となるに至るのである。例へば力學、物理學、化學の夫々の認識目的には、何等かの意義に於て夫々一定の特異の内容的制約を許すに依つて、各學が獨立の學として存在するを得るのである。故に「エレクトロン」の學說は、此の各學を通じて決して究極的の法則科學的認識目的には何等の變改を及ぼさずとも、其の之を制約する内容的要素に大なる變動を起さんとしつゝあると云ふ意義に於て、之等の特殊科學に大なる重要があるのみならず、又方法論上看過することを許されぬのである。歷史に屬する學問に於て

も亦同樣である、文學史、政治史、經濟史第の各歷等の認識目的が夫々の範圍內に於て、各特異の內容的制約を受けて依つて以て各學が獨立するのである。之等が又一般人文史と異なれりとするも、畢竟は認識目的の相違に其の論理上の根據がある。卽ち余は凡ての學問は二の認識目的の必ず唯其の一をのみ有せざるべからざるのみならず、其の各範圍內に於て更に獨立の學問的地位を有するが爲めには、論理上特異の內容的制約を許したる認識目的を有せざるべからずと主張したい。

茲に認識論の最も深き問題は橫はる。所謂『認識論の二途』より發足して、一形式は內容的制約を或る意味に於て許し、又或る他の意味に於ては之を許さずとの結論に達する。之を形容的に云ひ表はせば、下より形式を仰ぐ超越的心理學的方法に依れば、形式は其の範圍內に於て經驗內容の其の何れをも全き意味に於て攝取することを許さず、其凡ての內容を統一に導くものであるが故に、何等の內容的制約を許さぬと云はねばならぬ。之に反して上より形式を俯瞰する超越的論理學的方法によれば、其の形式が一個の全體の體系の中にあつて、其の全體の整正を保つ一員として、他の形式と區別して各其の處に其の特殊の意義を有するが爲めには、何等かの意義に於て內容的制約を許し、形式の各々が相互に相關聯して一個の階段をなすと云はねば

ならぬ。此の二の見方を相背反せしめずして統一に導き、俯仰して一律の解釋を許さしめ、而して無窮に連續せる一體として、之を體得せんとする慾求を指して、味ある哉言や「形而上學的慾望」と云ふ。而かも之に應ぜんとして立せられたる何等かの意義に於ける形而上學の許すべからざるは、既に吾等の熟知する所である。茲に永遠の哲學的追求がある。

我が經濟學の學問上の地位は何なりやと云ふ問に對して余の答ふる所は、上來の記述に從つてリッケルトの其とは同一なるを得ない。余は經濟學の認識目的は唯一のみあり得而して唯一のみならざるべからざること、亦他の特殊的經驗科學の何れにも等しからざるべからずと思ふのである。依つて次に起る問題は經濟學は自然科學に屬するや又は史學に屬するやと云ふことである。

余は此の點に於て既に多少の思索を重ねて其の結果を「經濟學認識論の若干問題」なる前掲小論文の中に述べて置いたが、畢竟ずるに經濟學の對象とする所は人類の經濟生活にあること勿論であり、而して其の經濟生活と云ふのは人類文化生活の一面的解釋なること是亦疑を挿むべくもない。而して人類の文化生活全般は、單純に去來する波濤の如く、前後に動搖する心理的運動の總體に過ぎざるものではない。

其處に一定の歸趣があり、目的があり、規範がある、卽ち價値生活としてのみ意義がある。價値を認めざる處に人類の生活は文化と何等の交渉を有し得ない。其の心理的運動は自然科學的心理學の對象となり、一般者 das Allgemeine に攝取せられ終つて、價値に係はらしめて初めて可能なるべき文化生活として意義は其の裡に其の處を見出し得ない。經濟生活も亦其が單純に經濟なる概念に制約せらるゝの故を以て、其丈で既に文化生活として或る特定の文化價値に係はらしめずしては考へられぬこと、恰も倫理生活、美的生活、法律生活、宗教生活が各特異の意義を有する規範の實現を吾等の經驗的歷史生活の中に求むる要望なく、從つて何等の交渉を文化價値に有せしめずして解釋せんとするときは、全く意義なきものとなると其の關係全然同じである。經濟なる概念は從來の經濟學者の論ずる如く、一切の時と處とを離れて、人類の慾望より出發して形成せられ得と信じられたるは、凡ての心理主義 (Psychologismus) に共通なる論理上の缺陷として、經驗素材の個々的なるを統一の認識に導くべき先天的原理と範疇とを其の行論の前提となしながら、之を顧みるを忘れ、却つて之を以て斯學本來の認識に導くべきことを阻害する所以なりとしたるに出づ。(10) 而かも經濟の概念に於て認識の統一に導くべき原理と範疇とは國民經濟、交換經濟、貨幣

經濟の如き歴史的概念が何等かの意義に於て介在することなくしては到底立せられ得ぬものである。然らば卽ち此の如き經驗的歴史生活としての經濟生活を論理上可能ならしむる所以の經濟的文化價値に係はらしむることなくしては、亦經濟の概念も形成せられないと云はねばならぬ。換言すれば此の如き經濟概念に制約せらるゝ吾々の經濟生活は文化生活の一面的解釋なりとするに於てのみ意義がある。

(11) 拙稿カント認識論と純理經濟學(國民經濟雜誌第十九卷第五號所載)參照

此の如き意味に於ける經濟生活を認識對象とする經濟學の認識目的が法則科學的たり得ざることは明であつて、余が經濟學を以て歴史學に屬すと見る理由も玆處にある。此の如くして概念的改造を經たる經濟生活に於て、或は更に單一化概念構成を試みることが出來る、其の成果は經濟史である。或は普遍化概念構成を試みることも出來る、所謂理論經濟學は是である。而かも後者が尙經濟學たり得る爲めには、斯學本來の認識目的を失ふ迄に普遍化概念構成を行ふことを許さない。卽ち此の意義に於て所謂經濟法則は到底自然法則たり得ないで、飽く迄所謂歸納的經驗法則の範圍を出づることを許さないと云はねばならぬ。若し此の範圍を逸して自然法則が求められ又實際に求められたる場合に於ては、其の認識の成果は自然科學的心

理學あるのみである。最早經濟學ではない。茲處には斯學特有の他學と區別さるべき認識目的は其の影を潜めて了ふからである(11)

(11) 前掲拙著參照

以上の意義に於て經濟生活は到底歴史的文化生活であり、詳しく曰へば其の一面的解釋である。卽ち經濟生活は、歴史的生活として文化價値に係はらしめて初めて論理上可能となり得る所の價値生活である。既に一個の價値生活である以上、經濟生活が超越的經濟的文化價値なる規範を實現する過程として見らるゝに於てのみ經濟生活の努力に意義がある。經濟文化の方向を指し示し、其の歸趣たるべきものは規範としての不許不としての經濟的文化價値卽ち是である。

余が茲處に經濟的文化價値と稱するものは、經濟學の認識目的としては史學一般の認識目的に對して既に「經濟的」なる內容的制約を經たるものである。而も史學一般の認識目的としての文化價値一般が、其係るべき範圍內に於ては形式的たるが故に、認識素材として與へられたるものに非ずして、寧ろカントの用語例を襲ふて認識問題 Erkenntnisaufgabe なりと考へざるべからざる如く經濟學の內面より觀察すれば、經濟的文化價値は又此の意義に於ける一個の認識問題でなければならぬ。二個の

不許不規範に於て內容的制約が異なる程度に於て存在するとは、其の各の係る範圍內に於ては各自共に形式に過ぎざることを妨ぐるものではない。而して其の之を形式なりとする所以は其が必然的、客觀的、普遍的妥當性を要求するが故である。若し經驗の事實が唯一、絕對のものであるとするとき例へば眞理の意義を實用論の云ふが如く人生に有用なる知識とし、善の意義を功利論者の云ふが如く最大多數の最大幸福とする如く、正義の意義を權力論者の云ふが如く權力なりとし、美の意義を心理論者の云ふが如く快感にありとするが如くんば、吾等は之を單純なる命名の問題と見るときは何等の問題も起さぬが、若し之等の經驗論的傾向に從ふ論者にして、眞理の意義、善の意義、正義の意義、美の意義を說くものとして卽ち吾等が附する眞、善、美、正義の妥當性を有するものとして認容すべしと要求するものあらば、吾等は此の場合直ちに何故にとの問を發することを禁じ得ない。而して彼等は何故にと問はれたるときに其の妥當につきて何物をも答ふることを得ない。卽ち吾等が問ふ所は人生に有用なる知識を眞理と名くるやと云ふのでなくして、何故に眞理の妥當性を與ふるかと云ふことである。最大多數の最大幸福に何故に善の妥當性を與ふるかと云ふことである。權力に對して何故に正義の妥當性を與ふるかと云ふことであ

る。快感に對して何故に美の妥當性を與ふるかと云ふことである。妥當は實在 Realität に附着せる屬性でもなければ妥當性を有すべき規範は或る實在に對する代名詞でもない。卽ち命名の問題に過ぎざるものではない。反對に妥當性の問題定まつて、初めて命名の問題に移り得るのである。眞理の妥當性先づ定まつて初めて眞理は人生に有用なる智識たり得るかゞ定めらるゝ。何ぞ況んや直ちに人生に有用なる知識卽眞理と稱する命名問題を提げて妥當性の問題を決せんとする淺薄なる論理上の逆轉を許さんや。時に眞理は——若し有用なる用語に意義あらしめば——人生に無用なる知識たり得べきなり。經驗的心理主義者に共通なる論理上の缺陷は、凡て命名問題を以て妥當性の問領を決せんとするにある。

妥當は此の如くして代名詞でもなければ、屬性でも無く附着物でもない。卽ち一個の要求を意味する。而て其要求は個々的經驗主體の或る者に限定することを許されぬと云ふ意味に於て、必然的なるべく、客觀的なるべく、普遍的なるべしと云ふのである。此意義に於ける要求は夫故に經驗內容に內在的に附着する能はざるは、尙因果律が個々の經驗內容の中に在り得ざると趣きを同ふして居る。個々の內容を超越して、之を統一する一範疇の形式としてのみ、因果律が存在し得る如く、妥當たるべ

く要求する規範は人生に有用なる又は無用乃至有害なる知識、最大多數の最大幸福乃至最小數の最小幸福、權力又は無權力、快感、乃至不快感又は惡感等の雜多の經驗內容の何れにも與らず、經驗內容の何れをも超越せる、換言すれば論理上に先天的なる、之等の雜列に於ける經驗內容を統一に導く形式でなければならぬ。此形式に照應せられて雜多の經驗內容は、各其處を得て各の意義を有するものと見らるゝにより意識內容一般が統一を保持するを得るに至るのである。規範は各經驗內容の何れかの一と同一者たり得ない。又其何れにも共通なるものゝ抽象でもない、經驗內容を統一に導く形式であるが故に、其の反面に於て又判斷意識一般が、依つて以て意義を有し認識論上成立し得る所以の形式たり得るのである。

Exkurs —— 此の點に於て考ふべきことは Thesis, Antithesis 及び Synthesis を以て進む Dialektik の意義である「正」が「反」を產み其の兩者の綜合として「合」を生ずるとする發生的思想に於ては、畢竟ずるに一より他に進むときに吾々の思惟上に於て常に之を飛び越すことを要求する。吾々は此の場合に「合」を以て「正」と「反」との兩者を統一に導く形式に等しきものとして考へ得られざるか。此の「合」により「正」と「反」とは初めて「正」たり「反」たり得て、其の各の處に其の意義を有し得るに至るのではないか。「正」たり「反」たる意義は正さに「合」あるに於てのみ意義があるのみならず「正」たり「反」たる各判斷は「合」に依つてのみ全體の統一を保つのである。ヘーゲルの Dialektik が此の過程を無限に導きたるは「合」に內容を與へたるが故である。內

容を有する正(判斷)は其自身に反(判斷)を豫想せずには措かぬ、即正反合の過程を無限なりとしたるは發生的思索に基く當然の結論に過ぎない。發生的思索は內容を離れては無意義であるからである。此の場合に「合」に內容を與へずして正反の超越的形式なりと考ふるに於て、正反を超越して而かも之に係はりて存在し得る理由が明になり得ると思ふ。

今經濟生活をして認識論上可能ならしめ兼ねて其の歸趣を示すべきものとしての超越的經濟的文化價値は、人類文化生活の一面的解釋としての經濟生活の內面より見ては、正さに上述の意義に於ける一個の規範であり、一個の形式である。茲處に客觀的普遍的妥當性は要求せらる。從つて經濟生活たる經驗內容の如何なるものと雖も規範たり得るものではない。此の點に、て經濟生活乃至其の改造に於て一定の內容を豫想し、之を規範として經濟生活、經濟政策を律せんとする凡ての試みは事實上の努力の價値如何は別問題として、論理上は矛盾たることを免れぬ、こは余が他の機會に於て既に述べた通りである。(12)

(12) 拙稿經濟政策の歸趣(社會政策學會論叢第九册所載)參照

即ち規範は此の意義に於て、形式たるに於てのみ意味がある。經濟的文化價値は形式たるの意義に於て之に係はりて初めて經濟生活は認識論上可能となる。乍併規範は要求を意味し且つ要求する力を豫想する。此の方面より觀察すれば、經濟生

活は經濟的文化價値なる規範に對し、價値に對して其の要求に應ずる過程なりと解釋し得べきである。換言すれば經濟生活は經濟的文化價値なる規範を實現する向上的過程を意味する。更に換言すれば經濟生活とは、他の一般人類文化生活と同じく、其の規範たる經濟的文化價値なる形式を內容的に論ずればカントの所謂一個のIdeeと見るが故に經驗世界に於ては之に出來得る丈充實せる內容を與へて、其處に客觀的普遍的妥當性を得んとする不斷の努力の過程を指稱するものに過ぎない。即ち經濟的文化價値なる規範は、此の意味に於て經驗的なる人類經濟生活に對して歸趣を示すものであり、理想を示すものであり、問題を示すものである。而かも其の形式に內容を與へんとする方面より論ずれば、其の實現は畢竟ずるに不可能と云はねばならぬ。規範は內容の觀點よりしては一個のIdeeに過ぎずして、gegebenせられたるに非ずaufgegebenせられたるものである。故に實現の期あるを知らない。只其の歸趣を示すものとしてのみ其處に價値が認めらるゝのである。悠々として五千載、只一抹の煙に似たりとするも、吾等の努力は常に理想に活くとするは只是が爲めである。

茲處に經濟哲學は其自身の問題を有する。經濟哲學は一個の價値學としては、其

の對象として超越的經濟的文化價値を規範として、不許不として、形式として有するに過ぎない。發生的思索に從ふものは、茲處に形而上學的實在を思はざるを得ざるは當然であるけれども、認識の對象として其が到底可能なり得べからざるは、カント既に一百年の昔に之を示した。而かも尙吾等の經驗的經濟生活に於て、普遍的妥當性を有する內容によりて、完全なる價値實現のあり得べきことに疑を挿むことを欲せぬものは、其の人只信仰に生くるものと云ふべしである。之に反して經濟哲學は、只一個の學として而して一個の價値學としては經濟的文化價値なる規範に係はらしめて、經濟生活を可能ならしむる所に認識論的根基を與ふるに止まらず、更に其の價値の妥當性が客觀的普遍的なるを立證し、且經濟生活が價値實現の過程なりと見られ得るによりて、經濟生活の歸趣と意義とを經濟的文化價値の中に示すことに於て其自身の問題を有する。更に此の如き經濟的文化價値の他の文化價値に對する關係を究め、茲に客觀的に統一せられたる價値世界を論ずるは、廣義の歷史哲學の任とする所でなければならぬ。此意義に於ける客觀的超越的價値世界は、更に經濟哲學に對して其の問題の方向を指示するものである。茲處に學問全般の最後の歸着點が横はる。此の問題の解明あつて、初めて吾等の學的良心は其の安靜點を見出し

得たりと云ふべきである。――per aspera ad astra!

（大正五年六月廿五日稿）